

ある。

此の『開拓民問題』がどのやうな讀者層に受け入れられるものか、紹介者には想像出来ないが、之が日本内地農村の中堅分子によつて讀まれる時に、其の本來の役割を果すのではあるまいか。

『開拓民問題』は開拓民たらんとするもの、教科書である。そこには宣傳が無く、冷い現實が書かれてゐるが、將來への希望もまた力強く示されてゐる。滿洲へ行けば十町歩の地主になれると思ひ、またそのやうな農民の希望につけ込むやうな宣傳は改められなければならぬが、悲觀的な現地報告の類も排斥されるべきで、其の爲に此の手頃な小冊子が登場した事は慶賀すべきである。しかも、論旨が終始一貫して、いさゝかの矛盾なきは著者の用意の良さを示し、多くの具體的數字を擧げつゝも、行文流麗にして一氣に讀ませしむるところの盡きざる興味を備へてゐる。(滿鐵弘報譯編『東亞新書』の中、昭和十六年六月中央公論社發行、八四頁、定價八〇錢)(淺井得一)

Ruth Benedict ; RACE ; SCIENCE
AND POLITICS, New York 1940.

何時の世にも、又何處の國でも、人種論が稱へられない事は無いが、何か歴史の轉換期となると特にそれが強く現はれるやうである。一例を擧げるならば、明治初年の我國とか、最近の獨乙とかの如きである。明治初年に於ける我國の人種論は日本人の劣等性を認め、それを改良する爲には他の優秀人種と混血すべきであ

るとの説まで生んだが、最近に於ける獨乙の人種論は己れこそ世界最優秀の人種であり、從てその純血を保たねばならぬと主張する。前者と後者とではその意味する處正に正反對であるが、どちらも人種學的に科學的根據を缺いてゐる點では相通するものがある。

一體、白人は優越感が強く、白人でないものは人間でないやうな考を有ち勝ちである。曾ての黒人奴隸制度や支那人の強制勞働の如きはその現はれの一つと言へる。排日とか黃禍論の如きも、一つは日本人や東洋人に對する恐怖のせいであるが、一つは白人の優越感から來てゐることも否めない。最近、歐洲のある指導者は日本は月みたいなものだと暗に日本人の創造性の無いこと、從つて彼の屬する人種より劣等であるやうに述べてゐるが、これは現狀のみに捉はれた考へ方で、さう言ふ彼等が曾ては他國文明の模倣者であつた事を忘れてしまつてゐる。獨乙あたりの人種學の本をみると、大てい己れの屬する人種が歐洲の中でも生來最優秀であるかのやうに書いてゐるが、これも結局獨りよがりの優越感の産物でしかなく、科學的根據は極めて薄弱である。

白人が特に優越感に富むと言ふのも、その人種に特に備はるものではなく、恐らく社會的環境の然らしめたものであらう。日本人も最近では可成り優越感を有ち始め、他人種との混血によつて、その素質を向上せしめやうなどといふ考へは最早や昔の夢物語となつて了つた。

凡そ人種と人種の優劣性とは全然無關係のものであつて、人種

學上科學的に我こそは世界最優秀の人種であると主張することも彼こそはこの世の劣等人種であると決める事も、出来ない相談である。古來、文明を創造して來たものは決して同じ人種ではなかつた筈である。

然るに、近來とみに人種の優劣が決定的であり、而もそれが人種學上科學的に論證せられ得るかの如く主張せられ、それによつて人種イズムを根柢付けんとする企てが一部で試みられてゐる。

本書の著者、アメリカ、コロムビア大學準教授、R・ベネディクト女史は斯る誤まれる主張は結局人種の意味する處に人種でないものが導入せられた結果生じた混亂に基くものであるとし、本來の人種の意味や人種主義の意味を諸家の言を引用しつゝ、研討してゐる。即ち人種は生物學的遺傳による一群の身體的特徴による分類で、極めて客觀的・科學的なものであるが、人種主義は一種の迷執によるもので、自己のグループこそ此世にユニークな、價値ある存在で、若しもこの自己のグループが弱者となることがあれば、この世のあらゆる價値は消滅し去ると言ふドグマに據るものである。従て、人種主義を歴史的にみると、古くは所謂ユダヤの選民思想以來、或は階級闘争の具となり、或は國家意識と結合し、常に世界を闘争と混亂とに陥入れて來たのである。最近、ナチスが己が選ばれたる人種として、アリアン人種を最優秀なるが如くに説いてゐるが、所謂アリアン人種とは人種學上からは決して一人種を形成するものではない。従て、この意味からも科學的に一人種が特に優秀であるとは言ひ得ず、ナチスの人種イズム

も、結局非科學的なドグマに過ぎぬ。此の様な人種イズムは元々人種そのものが原因となつて生れたものではなく、社會的摩擦がその原因であり、その争ひを正當化する爲に、それに科學的僞裝をほどこしたものが、即ち一種の手段である。争ひは屢々正當であり

時にそれは必要でもある。然し、それかと言つて疑はしい人種主義の基礎の上で、それを認める事は出来ない。ナチスは獨乙こそ文明の擁護者の如く言ふが、斯る非科學的排他主義は古來の人種主義と異らず、徒らに世を毒し、文明を破壊する誤れる思想である。文明の進歩は斯る人種的排他主義には存せず、人種相互の依存關係より生ずるものであり、それはデモクラシーによつて始めて達せられる。要之に、本書の主眼とするところはナチスの人種主義に對する抗議であり、最後にナチス人種主義に對する一群の人類學者、心理學者、生物學者の決議と宣言とを掲げて論文を結んでゐる。然し、その説くところ、概して科學的な論議に終始し、従て、斯る論議で、科學的基礎から出發したものでない獨乙の人種主義が是正せられるとは考へられない。この點いさゝか物足りない感じがするのである。

近來、我國に於ても人種意識が高揚せられ、人種論漸く熾ならんとする時、本書は亦以て參考とするに足らう。最後に目次を掲げて置く。

序言。一、人種主義——現代のイズム。二、人種——さうでないもの。三、人種分類への努力。四、移住と混交。五、遺傳とは何か。六、誰が優秀なりや。七、人種主義本來の歴史。八、何

故人種的偏見が生ずるや。科學者の決議と宣言。(本文二六六頁、丸善社、拾壹圓貳拾五錢)〔朝永陽二郎〕

タイ國地誌

能 登志雄著

タイ國は今歴史的大轉換の眞中にある。變轉極りなき世界動亂のさなかにあつて、此の印度支那半島の中央に位する獨立國も今は世界史の大いなる流の波にゆすぶられて、新しき鼓動を期待しつつも傳統の激しき苦惱にあへぎつゝある。過去僅か一年の間に於いて、日タイ友好條約の締結、吾國の調停による對佛印國境紛争の解決、更に今回の日佛印間共同防衛の成立と皇軍の南部佛印進駐等、兩國間の眼まぐるしき程の事態の展開のうちに、今われわれ國民は最も深き關心をもつて此の國の立場を凝視しつゝある。

過ぐる滿洲事變の際に此の國のとりたる行動以來、われわれは新なる認識をもつて此の國に接してきた。だが、爾來「日タイ親善」なる表現の持つ意義は安易なジャーナリズムの報道によつて多分に皮相的な把握をもつたまゝ、今日に及んであるおそれがあるのではないだらうか。單純なる親善の言葉の背後にはともかくも今日まで獨立を維持し來つた所以の一たる緩衝國的性格のあることを忘却してはいけない。

近時南方地域に關する著書の氾濫は全く驚嘆すべきものがある。タイ國に關してまたひとり其の例外たるを免れず、數多くの

紹介、翻譯、解説書の續々と刊行せられるのを見る。然かしながら其等の多くは單なる旅行記、紹介の類であつて、なかには全く實際的出版物も少くはないようである。かゝる際に刊行せられたる本書の意義は如何なる點に存するであらうか。

先づ本書は現在までに公刊せられたる邦語によるタイ國關係文獻のうち最も地理學的に記述せられたる書であると明言することが出来る。吾々は邦文のタイ國關係文獻のうち、既に概説書としては東亞經濟調査局刊南洋叢書「シヤム篇」或は特殊研究として宮原義登氏著「タイ國に於ける日暹關係」等の極めて優れたる著書を擧げることが出来るが、地理學的と稱し得る記述の著書には今まで接しなかつたものである。

だが、此の書のうちから著者の創意に満ちた方法をもつた地誌の記載の多くを求むる人があればそれは失望に終るであらう。或はまた此の書のうちに著者のフィールドワークの體驗をとりいれた生々しき地誌の記載や數多くの文獻涉獵の結果による記述を期待するものも亦豫期に反するであらう。此の本は序文にも一寸記してある通り殆んどクレトナーの「暹羅」Wilhelm Cremer: *Stam, das Land der Tai, Sautgant, 1935* に依るものである。

クレトナーは現ミュンヘン大學教授、タイ國滞在數ヶ年間の實地調査に加ふるに在來の文獻を涉獵して書きあげたのが此の書であつて、これはベング教授鑑修の地誌叢書の一つである。「タイ國地誌」の原書とも言ふべきクレトナーの此の書は同書卷末のビブリ